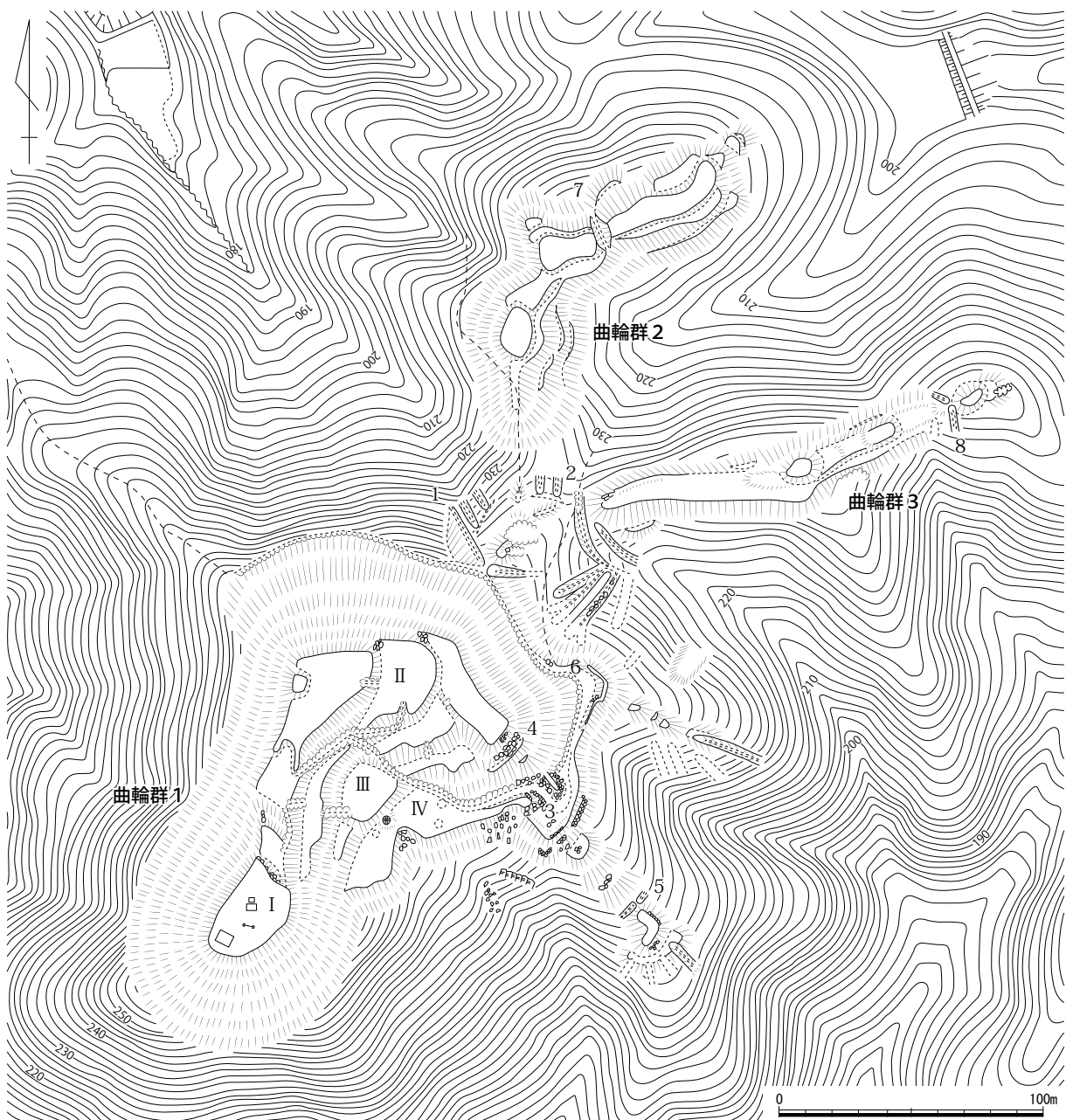


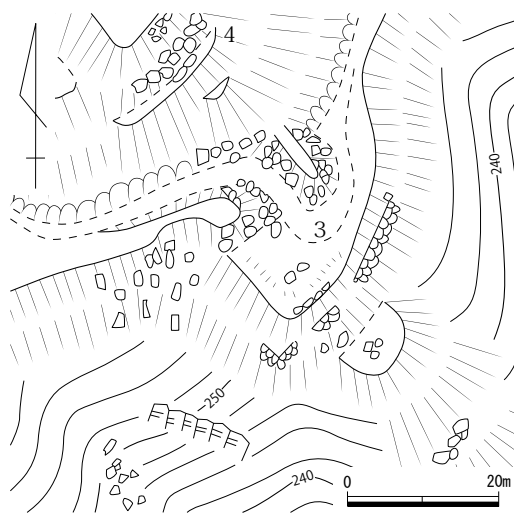
立地 城は総社市山田・下倉・久代にまたがる山頂部に位置する。城域最高所にある曲輪Ⅰからは新本川流域から総社平野までをも一望でき、遠くは児島、玉島灘まで見据えることができる格好の位置にある。城の西麓には、戦国時代当時海浜部であった玉島から美袋までを南北につなぐ間道（通称「玉島往来」）が位置している。戦国時代の玉島は高梁川の河口域にあっており、その対岸には室町時代に守護倉があった西阿知が所在する。さらに城の南の平野を流れる新本川を遡れば、山陽道の要所、矢掛へ通じる美山川中流域へ出ることも可能である。このように、鬼身城跡は山陽道を交差、あるいは平行して備中国中南部から瀬戸内海までを貫く間道を押さえる要衝にある。



第 224 図 鬼身城跡縄張り図 (1/2,500)

概要 城は諏訪神社の位置する曲輪Ⅰを最高所に据えた扇形の縄張り（通称「扇の縄」）を持つ連郭式山城とされてきた。しかし、このたびの調査により、堀切Ⅰを超えて北に派生する二つの尾根上にも城域が広がっていることが判明した。従ってその規模は南北 360 m、東西 180 mにも及び、備中国では有数の規模を誇る。ここではこれまで認識されていた諏訪神社周辺に位置する曲輪群を「曲輪群 1」、「曲輪群 1」の北、北東方向に連なる尾根上に展開する曲輪群を「曲輪群 2」、そして堀切 2 を挟んで東西方向に続く曲輪群を「曲輪群 3」と命名し、それぞれ記述する。

「曲輪群 1」は曲輪Ⅰを要とする求心的な縄張りであるが、随所で横矢掛けを意識した曲輪配置となっているだけでなく、要所には石垣が構築され防御を固めている。石垣の多くは崩壊しているが、城内全域で転石が見られることを勘案すれば、相当数の曲輪が石垣により防御されていたことを想定すべきであろう。現在、諏訪神社の境内となっている曲輪Ⅰからは北東方向に 4 面の曲輪が逆 L 字形に連なる。ここでは『日本城郭体系』に習い、この 4 面の曲輪を「第一連郭」と呼ぼう。「第一連郭」の東側に帯曲輪となる曲輪Ⅱが配される。「第一連郭」と曲輪Ⅱの間は高さ 3～5 m の切岸により隔てられる。また、曲輪Ⅱに対しては、その上段にあたる「第一連郭」から横矢を浴びせることが可能となっている。同様に曲輪Ⅱからは一段下の曲輪Ⅲから北東方向へ続く 3 面の曲輪に対して横矢を掛けることが可能である。「第一連郭」と併せ、重層的な防御構造をなす縄張りとして評価できるであろう。最下段となる曲輪Ⅳには井戸と考えられる窪みがいくつか認められ、少なくとも一つは石組みを伴うものであった。さて、「曲輪群 1」の中でも特に注目すべきは、城内への入り口となる虎口 3 である。虎口 3 は曲輪Ⅳの東に位置し、城外側へ北から突出するものと、これに対して虎口受けとなり、東西方向に突出する二つの土塁から構成されている。虎口受けとなる土塁は、その先端で南北方向にその向きを変えている。結果、この二つの土塁は柵形状空間を形成することになる。城内へ入るにはこの土塁の間にある隘路を進まなければならない。従って、その導線は虎口 3 の中央に入ったところで西へ折れ、さらに進んで曲輪Ⅳの平坦面に入る地点でもう一度北へ向って折れる。その間、虎口 3 の北に造成され武者走り 4 から横矢が掛かり続けることになる。また、両土塁の周辺は多数の転石が見られる。転石は 0.5～1.5 m を測る大形の石材と、拳大～0.3 m 程の小形の石材が認められた。これらは元々土塁を覆う石垣を構成していたと推察できる。さらに虎口 3 の南側には東西 20 m、幅 10 m を測る広場があり、城内から出撃の際に利用される馬出的な機能を持っていたものか。さらに、この広場の下の斜面には高さ 0.5～0.8 m を測る石垣が認められた。この石垣は隅角をもつもので、高さこそ低いが、栗石を伴う本格的な石垣である。虎口 3 から南東方向へ向かって下る尾根筋には堀切 5 が掘削され、その先にも、東側を石積みで固めた曲輪が続く。この曲輪には少なくとも 1 本の縦堀が掘削されていた。また、虎口 3 の南西に位置する谷には、城内で使われる石垣の石材を切り出したとみられる露岩があり、その周辺に多量の転石が見られる。「曲輪群 1」の北西には土塁 6 が構築されている。土塁 6 は複雑な折れ線を見せる。これは土塁 6 の北及び東側に掘削



第 225 図 虎口 3 拡大図 (1/1,000)

されている、畝状豎堀群に対する横矢を意識したものであろう。「曲輪群Ⅰ」の北には堀切Ⅰが掘削され、北から続く尾根筋に沿って進む進入者に対して防御線をなす。堀切Ⅰの中央は諏訪神社への参道造成に伴い埋められている。さらに西側も崩落によりその形状が判然としないが、堀切底には明確な掘削痕跡があり、本来はかなり大規模な堀切であった可能性が大きい。堀切Ⅰから尾根筋を進むと小曲輪が造成されており、その周囲に豎堀が掘削されている。なお、堀切Ⅰから西へ進んだ場所に谷筋の鞍部がある。この鞍部の周囲は地形の崩落が激しく確証は得られなかったが、この位置にも堀切が存在していた可能性を指摘しておきたい。このように、「曲輪群Ⅰ」は主郭となる曲輪Ⅰを要とし、曲輪配置そのものが横矢を意識した防御構造をもっていた。さらには石垣化された枡形状空間や、土塁、堀切、豎堀を組合わせた技巧的な縄張りを持つ。

「曲輪群Ⅱ」は4面の主要郭面とその周囲に造成された腰曲輪からなっている。主要郭面の中央付近に堀切Ⅶが掘削されている。加えて、周囲に幅5m程度の小曲輪が階段状に造成されている。各曲輪の平面形は不整形で、各曲輪間を隔てる切岸も高さ2～3mと低い。

「曲輪群Ⅲ」は東西に延びる尾根上に展開する。曲輪には自然地形や、古墳の痕跡かと思われる高まりが3か所遺存しており、その造成は完全とは言えない。また、確実な防御施設は堀切Ⅱ周囲に設けられた土塁と豎堀、及び東端近くにある堀切Ⅷのみである。

以上のように、堅い防御線を持つ「曲輪群Ⅰ」に対して、「曲輪群Ⅱ」及び「曲輪群Ⅲ」の防御機能は、一段劣るものと言わざるを得ない。最大となる曲輪の幅を比較すると「曲輪群Ⅰ」では30mを測るのに対し、「曲輪群Ⅱ」、「曲輪群Ⅲ」ではいずれも10mを測るに過ぎず、その差異は明らかである。

文献・伝承 本城の築城時期について記す文献を欠く。『備中府志』並びに『備中集成誌』とも、本城の名を「高見鬼身ノ獄」とした上で、神代において吉備ノ冠者に与力した有木の冠者が居住していたとの伝承を記す。時代が下って天正2～3（1574～75）年に掛けて勃発した、「備中兵乱」の舞台として再登場する。『備中兵乱記』には天正3年1月14日に鬼身城攻めが開始され、同月29日に城将である上田実親が自刃、開城したという。上田実親は備中松山城主の三村元親の弟で、上田氏に養子に入っていた。乱後、城は毛利氏の重臣である宍戸隆家に与えられ、在番として佐々部氏が入城した。天正7（1579）年以降、高梁川流域が毛利氏と宇喜多氏・羽柴（豊臣）氏の境目地域となり、緊張状態となる。天正11（1583）年12月5日付け小早川隆景書状では、鬼身城が境目の城として認識され、軍勢、兵糧、弾薬などを保持するよう、五竜（宍戸氏）に言い聞かせたとする。天正13（1585）年に国分けが確定し、翌天正14（1586）年、秀吉は毛利輝元に対して朱印状を交付した。その中で一条を設けて重要な城の守りを固める一方、不要な城から立ち退きを命じている。これを受けたものか、天正19（1591）年、輝元が鬼身城や猿掛城他、備中国境に位置する諸城に対して心使いを務めるよう指示している。その具体的な内容は不明ながら「曲輪群Ⅰ」に見る技巧的な縄張りはこうした城主交代、あるいは境目の城として守りを固めた際に改修を受けたものではないか。なお、正確な廃城時期は不明ながら、毛利氏の防長移封に伴い、慶長5（1600）年頃のことかと思われる。（和田）



写真106 虎口3南の石垣（南西から）